

第3回日本建築設計学会賞大賞審査講評

竹山聖

無根拠なフォーム

作品を貫く思想と方法論が時代と社会と建築とどのように切り結ぶか、という日本建築設計学会賞選択の趣旨に鑑みつつ、審査員が各作品についての見解を順に述べることから審査は始まった。

まず倉方俊輔が「daita2019」と「サンカクヤネノイエ」を<無根拠なフォルマリズム>という観点から推挙した。空間構成の原理をしっかりと持った造形であるか、そしてその原理が新しいかを問う眼差しである。五十嵐太郎は「金峯神社」の意義について力説した。全国に数多あるはずの、ケアされぬあるいは打ち捨てられざるを得ぬ神社の再生のための建築的装置と地形に即した祭礼の仕組みの提案である。古谷誠章は「UTSUROI TSUCHIYA ANNEX」の地域社会における意義について語った。消防署のリノベーションであり、その痕跡を生かした内部空間と、街のにぎわいの拠点となる新たなプログラムの提案を重視する姿勢である。竹山は各審査員の意見の取りまとめを行いつつ、倉方と同じく「daita2019」の不思議な世界観と絶妙なスケール感に魅かれることを述べた。美しさと建築的完成度という点で「サンカクヤネノイエ」にも言及した。

全体の議論は各作品についての論評に移り、「古澤邸」では街との関わり、とりわけ前の道を取り込む視点が評価された。厳密な構成と空間との関わりや練り込まれたディテールにも議論は及んだ。ただ厳密な構成なだけにスケールの扱いに窮屈な感が拭えぬという意見も出た。「伊達の家」は北海道らしくおおらかなスケールと割り切った構成、漫画本に囲まれた自由闊達な空間の魅力も大いに評価された。「古澤邸」と「伊達の家」はともに確たるフォームを有している。正方形グリッドとこれを支える十字形の柱梁配置の禁欲性は建築の原型を追求する究極のラショナルリズムである。「伊達の家」の入れ子構造、そして空間のスケールの自在な伸び縮みと空気環境の割り切り方も、選びとられたフォームの説得力を増している。ただ、この厳密なフォームや入れ子状の空間について、既視感もあり、やや発見的な面白さに欠けるという意見も出た。この点は「サンカクヤネノイエ」も同様であって、美しい空間と形の構成に、圧倒的な新しさは見出しにくいという意見である。

フォームの議論を紹介したが、一言付け加えておきたい。ここでは、当初倉方の用語である〈無根拠なフォルマリズム〉を敷衍し、時代や社会に左右されるのでない建築的自律性を語るための言葉として、これを肯定的に捉えつつ一連の議論のベースとなったのだが、古谷からフォルマリズムは主義といった響きが強く、むしろルイス・カーンのいうフォームというべきではないか、という発言があり、〈無根拠なフォーム〉という言葉が、建築の普遍的な価値を語る手がかりとなった。

議論はやがて、プログラムに重点を置くかフォームに重点を置くかに移っていった。「金峯神社」は時代に取り残された社会の、あるいは制度の再生を図る建築的試みとして画期的であって、地域と地形と空間的物語という思想と構想の強度も秀逸、ローコストで短期間の工期も革命的だ。ただ、空間の組み立ての術として、極限的なシンプルさを追求したために、豊かさが失ってしまった憾みがある。「UTSUROI TSUCHIYA ANNEX」もプログラムの有する社会的な意義が評価された。城崎温泉という魅力的な温泉街に欠けている、人々の自由な出合いの空間を提供するカフェとゲストハウスであり、ファサードは川霧をイメージさせるステンレスのコンベアベルトのスクリーンであって、それが街と建築を融合させ、消防署というプログラムもその痕跡をうまく活用することによって地域の記憶の継承を果たしている。

ここでプログラムとフォームの議論がさらに沸騰する。なるほどプログラムは建築の主要な出発点だ。そして到達すべき目標でもある。共同体の物語を共有すること。これが建築のおそらくは最も根源的なモチベーションである。ただ、そのプログラムが時代や社会の変化によって移行するとき、そこに立ち現れるのはフォームであって、そのフォームを構想し得たかどうかには建築の普遍的な価値はかかっているのではないか、という議論である。「金峯神社」はいかなるフォームを提起したか。そして「UTSUROI TSUCHIYA ANNEX」はどうか。この二作以外の住宅作品に比べ、たしかに社会に対するインパクトは数段優っている。ただそれが建築の普遍的なフォームを切り結んでいるか、という点に議論は集中した。

「サンカクヤネノイエ」の原理的形態による美しく構成的なフォーム、「古澤邸」の厳密で抜き差しならない地点まで追い詰めたフォーム、「伊達の家」のおおらかで自在な入れ子のフォーム。これらはみな見事な解決であり建築作品であるが、見たことのない新しさに欠ける、という評価も出た。その見たこともない

新しさ、というのは実は「daita2019」と比較してのこと。「daita2019」は、都市の街角の戸建て住宅としても、三世帯住宅としても、立体的に構成された庭としても、各々の居住メンバーの個々の営みに応答した多様な空間としても、えもいわれぬ不思議なフォームならざるフォームを見せてくれている。コンパクトな全体の中に複雑な部分が組み込まれて、あたかもアドルフ・ロースのラウム・プランが自在なフォームの中に溶け出したような構成である。

神社やゲストハウスのように直接に地域や社会と切り結ぶ建築に刻み込まれたフォームと、間接的に時代や社会を映し出さざるを得ない住宅というアジール、すなわち社会とは本来的に逆立している小規模共同体の拠点である住居に建築のフォームを投影する試みの、どちらに軍配が上がるか。

司会者を兼ねざるを得ない竹山が、決して多数決で決定する性質の賞ではないものの、一旦決を取ることにした。結果は、古谷が「UTSUROI TSUCHIYA ANNEX」を推し、倉方、五十嵐、竹山が「daita2019」を推す、という結果となった。ただ古谷も、「daita2019」は是非訪れてみたい魅力を感じる作品である点は同様であることを追加して述べ、あえて意見の集約を諮ったところ、総意として「daita2019」の日本建築設計学会大賞授賞の合意に達した。

フォームという、建築の存在の奥底に横たわる原理とでもいったものを考えさせられる作品群が集結した今回の日本建築設計学会賞受賞作品展において、「無根拠なフォーム」というキーワードが提出され、これが建築の新しさに結びつくのではないかという議論がなされたことが強く心に残った。新しさといっても、それはただ時代の流れに乗るというものではなく、流れに抗っても、あるいは遡っても見出しうる本来的かつ原理的な新しさであり、構法や空間構成やスケールや形といった建築を形作るあたりまえのものたちの最中に見出しうるものなのだということを痛感させられた審査会であった。手垢のついたフォームを捨て去り、無根拠なフォームを探すべく新たな荒野に乗り出す勇気を持ちたい。

なお、今回の審査会は新型コロナウイルスが広がりつつある4月4日、緊急事態宣言の発される前であったが、その機会を逃せば展示を見ての審査が不可能であり、まさにその日に審査員が大阪に集合することが可能であったことから、あえて審査会の開催に踏み切った。展覧会も当日は閉じ、公開審査を旨としてきたこれまでと異なり無観客で行うこととなった。関係者の方々には大変なご協力をいただき、感謝にたえない。そして出品者の方々には、公開審査という

形を取れなかったことを心からお詫びしたい。世界はまだ新型コロナウイルス蔓延の渦中であって落ち着く先の展望も見えない状況が続いているが、人類の歴史は疫病との戦いの歴史でもあり、明けない夜はない、という希望をもちつつ、この時間を有意義な創造と蓄積の時間として行ってほしいと思う。

2020年4月16日